

# 「禪の國際化と私の役割」

大本山總持寺安居 浅井宣亮

近代以後、西欧では宗教の世俗化が進行して、信仰心が薄らいでいるといわれる。確かに、科学万能主義・合理主義が浸透し、科学の発展により将来理想社会が実現すると多くの人々が信じていた近代においては、それは事実だろう。

しかし現代になると、社会の矛盾がいろいろ露呈するようになり、状況は変わってきた。科学により理想の社会を造ることが可能かどうかという問に対し、イエスと答える者はもはや少數になりつつある。

人は苦悩と解消する役目を果たすものとして、宗教より科学に魅力を感じるようになった。そして合理主義的思考により、「神」の存在を疑問視する人は増加し、「神は死んだ」とさえいわれるようになってきた。

期待を裏切ることが多くなり、頼るものを見失つた人々は漠然とした不安にさいなまされてい る。

科学には限界が見え始め、未来はバラ色とい う夢は結局夢でしかなかつたと感じられるよう になつた。そうかといつて合理主義的思考方法



を教えられた者は、「神」の存在を純粹に信じるといつた無垢な心はもはや多くは持ち合わせてはいられない。こういう状況の下、東洋思想・イン ドや仏教の哲学・神秘主義などにその打破を求める者も現れてきた。「禅ブーム」などと呼ばれたものも、この風潮にのつたものだろう。

「禅」は鈴木大拙氏により伝えられ、その道元の默照禪系の考えは、欧米の知識人に非常に歓迎されている。そして西歐的思考とは次元を異にする新しい精神の救済方法・いのちのよりどころとして大いに期待されている。

では「禅」の特色とは何であろうか。禅宗も一宗教ではあるが、坐禅という修行方法自体にその焦点を当てていることにその独自性が見ら れる。信の宗教と対照的な行の宗教である。こ の「行」といことを中心に置くということは、現代にあつて非常に重要な意味を持つてくる。疑うことなく信じるということは、現代人によ

つて難しい。が、坐禅をするということは容易にできる。つまり、「信」から宗教に入していくことには抵抗をみせるが、行をすること自体には何ら問題はない。宗教の世俗化がいわれる現代においても、「行」をきっかけにして宗教心を興すという道は十分広く残されている。

実際北米では、禅宗と対照的な信の仏教といえる淨土真宗が、布教活動の一環として坐禅を取り入れている。またキリスト教においても、世界教会運動などにカソリックと禅の結びつきを見ることができる。これ以外にも、禅と他の宗教との結びつきは数多く見つけられる。このように、身心一如という禅の特色は現代において人々の信仰心を高めるための方法として重要な意味を持つてきている。

そのことは、布教方法にも現れてくる。道元禪師は「痴老の比丘黙坐せしを見て、設斎の信女悟りを開きし……」と示しているが、これは端的な例となるだろう。つまり言葉による布教以上に、人から人に直接伝えるという布教の形を重視する。およそキリスト教など信を前面に出したものでは、まずその説明から始まる。聖書などといった、その信仰を明確に述べた書などが布教活動の中心とされよう。こういう書物に書かれていることを理解納得させることができなむち布教である。そこでは布教師は、いかに一般の人内容をわかりやすく説明するかという役を担っているだけであって、補佐的な役割を果たす。あくまで主となるのは、キリスト教であれば聖書である。

また新興宗教の場合、素人である庶民信徒の布教や学習を支援するためと、組織の経営に資するために、いわゆる間接布教（出版やラジオ放送）を発展させる集団が多いことがその組織上の特色の一つになつていている。これも言葉を使用した布教であるが、教義を理解納得させるこ

とがある程度容易で、それが即布教となるもの  
の場合は、多様な布教方法が考えられる。

これに対し、道元禪は正伝の仏法という立場  
を取っている。釈迦牟尼仏より師資相伝してき  
た正しい仏法、すなわち仏陀が衣法を摩訶迦葉  
に付嘱し、それより西天二十八代目の達磨大師  
が中国に伝え、東土六代曹溪慧能大師にいたり、  
歴代の祖師が相伝相承され、ついに如淨禪師よ  
り道現禪師に相伝された只管打坐の坐禪を意味  
するのである。その教義は言葉で説明すること  
は難しく、書物に著しづらい。そのため人から  
人へ直接伝えるということが必要であった。ま  
たこれからも必要であろう。「普勸坐禪儀」「坐  
禪用心記」は主に方法論を述べているのであつ  
て、聖書とは全く異にしている。「正法眼  
藏」にしろ、その難解さで有名であり、民衆に  
も意味が容易に分かる聖書などとは全く対照的  
である。

禅宗では、布教師は教義を伝える補佐的な役  
を果たすだけのものではない。宗教活動のある  
じとなるべきものである。そして真の布教には  
人が不可欠であるのだが、現在その指導者の数  
はおよそ十分であるとは言い難い。私は未熟で  
あるが、将来諸先輩方のように国内外を問わ  
ずには布教活動の一翼を担えるようになりたいと  
いう意志は強く持っている積もりである。海外  
での修行体験はそのためには不可欠だろう。そ  
の上それは海外において布教する時に役立つだ  
けでなく、日本における禅の国際化にも大きな  
手助けとなるに違いない。海外では、日本の修  
行僧ということで辺りの刺激になり、日本では  
逆に海の向こうで禅はどのように受け入れられ  
ているかを示すことにより辺りの刺激となり、  
禅の国際化に力を尽くすことができれば真に幸  
いである。そうすることが私の役割だと信じて  
いる。